

第13回日本医療情報学会看護学術大会開催 世界一高齢化の進んだ 日本だからこそ「多職種協働」を！

去る8月4-5日、タワーホール船堀（東京都江戸川区）にて、日本医療情報学会看護部会による第13回日本医療情報学会看護学術大会が開催された。すべてのワークショップを、「看護師を含む多職種での発表に限る」として行なうなど、看護以外の視点（医師、医師事務作業補助者、薬剤師、ケアマネジャー、工学博士など）を積極的に取り入れ、議論が内向きにならないよう工夫した点など、多職種協働というテーマを反映する学術大会となった。

瀬戸僚馬氏（東京医療保健大学医療保健学部医療情報学科講師）による大会長講演は「多職種協働を支えるIT」と題して行なわれた。病床あたりの医療人材が少ない日本におけるチーム医療では、明確に職種ごとの業務範囲を決めて分業するのではなく、職種を問わずケアを提供する体制を整えることが必要だと瀬戸氏は指摘する。これを可能にするのは、職種を分けることなく患者情報を共有できるシステムだ。これは、紙カルテであれば物理的制約により難しいが、電子カルテであれば実現できる。しかし現在は、情報量が増えすぎ認知限界を超えているため情報共有しきれていないなど課題は多い。①多職種が共有する患者情報のあり方の見直し、②多職種が使うステータスボードの開発、③データの二次活用方向の確立、④業務フローインターフェイスの再設計、⑤情報需要の対応策検討という今後の研究課題を述べるとともに、医療情報という医療全体の問題は、看護師だけで議論するのではなく、多職種でともに考える場を増やすことが重要だと締めくくった。

次いで高橋泰氏（国際医療福祉大学大学院医療福祉学研究科教授）は特別講演「多職種協働による今後の医療福祉」において、職種間連携とは、相手が知ったら有用な情報を提供しあう、業務間の情報交換

であるとの考えを示した。社会構造が変化し、医療と福祉の連携が重要視されているが、なかなか広がりを見せていないのは、かける労力ほどに成果が得られないことが原因であると指摘した。これは、他の職種が何をしているのか知らず、お互いどのような情報が必要なのかもわかっていないことによる。かける時間に見合った成果を得るためには、職種間連携に必要な情報を整理し、プロトコルをつくるべきだと述べ、これを支えるための情報インフラとお互いが効率よく連携するための教育ツールの一例を紹介した。

鎌田智恵子氏（東京医科大学病院看護部長）がオーガナイザーを務めたシンポジウム「システム導入・更新は業務プロセス改善のチャンス！」では、柏木公一氏（国立看護大学校看護学部講師／医療情報ケアプロセス研究会代表）、小野律子氏（大阪警察病院看護師）、市川雅彦氏（慶應義



塾大学病院理学療法士）、田中詳二氏（神戸市立医療センター西市民病院薬剤長）が情報システム導入の際に必須となる業務プロセスの可視化に役立つ業務フロー図を紹介、情報システム導入・更新時の業務プロセス改善の考え方や実例を講演し、質疑応答において議論を深めた。

大会長講演、特別講演、ランチョンセミナー「クラウドとマルチデバイスでワークスタイル変革」山野辺裕二氏（国立成育医療研究センター情報管理部情報解析室長）については、動画配信を行なっている。また午前中の講演が、当日午後より学会場に設置されたPCでも視聴できるようにするなど、学会におけるITの活用の一案が示された。動画は以下のページで来年2013年8月31日まで無料配信。

<http://www.jami-ni.jp/2012>

（本誌編集室）

